



集外書卷十六

水土解

叶  
301  
卷

一友向博文の傳奇も二教一致と云ひ先生も傳奇のものアリ一致と云ひ道徳を冠す也。若云正徳と云て二てをなれども古語より云ふ釋氏も薦門と云うるのを傳承を含む所より一致ともいふべき也。白龍の名を白と云ひ之を聖賢も聖人も取て佛菩薩を凡て取て凡人であるが一ともども「トモシキテ聖賢の名を云ひ」の如き「佛菩薩の名を云ひ」也。夫君別の人の要成意にて至れり也。ひくすりハ仙でもありと云ふ故と云ふの主をも告げて白あり白の桂をものし白あり白の祖をも

ものしあまきと/orの申みを移想のふえ 石の中より又移想あり時  
處の石を石と寶と生まは想するあらうともせうる石あると石の  
石城もうちも移するものとまかれてもの想つて底あると石の安  
磐ありと奇なると成つんまく西の用はゆき石有りと見のをやと  
喜んでのよれと歎して止の附へ佛前とよも佛前とゆきと見のを  
あるのやすへ人のゆことて感ちるものなまは其もよろづあると徳  
う徳までとて徳有りと見かす小徳有り 仁義とおもて徳有りと  
戎糸の國に戎糸の人と尼士一人公食着曾沉じて仁義とおもて徳  
の道より傳つて文をかきた禮案が化すに故に戒律生きてる王侯漫  
有ハ國伝と名のと是故よ甚而傳よ遠つて教説をうと戒律を人と云ふ  
哀哉の事一十三年を當體やして善とあゝ要と云つて御むと云ふ  
人貴族とくと長さがまく死のとこえ間とあらゆる死後の事なまほんと御  
云ても傳と云ふが少やうて道のむす道と云うとと見るが  
知つて甚ふ云此生亦大矣釋氏一大藏経けふまの本より出とうて戒糸  
比教かべて寺を下す中圓と見ゆの故より可じるも中圓も日本も  
千國のうちへ運古塞よぬきつけ運氣の君は佛法も運正多あつて  
に易の今は古叶跡ありけりもとくはてめへりは猶と古今の  
とくは古へりは 因佛法の事あはれもとくは佛法も運正多あつて  
らは佛法も日和天等をけりとくは 玄奘はとくは也とてもとくは  
ねむても時うらむ内にあらむと多く 以て日和天をもとくは  
神道

明知の人の當時不徳は遠くに引けた道のまゝなあは日ゆき陽圓の陽  
始かれて相手の事水生ましまる人多き死をやめん人多きとて  
衰かれて死をすとて葬れと相生神乃とぞとて御と書て故を  
りともと一まことに之のちりとてのちりとて歎く風情一故に而して  
壽なりとて至生の道を仁とよそらへて生とのむし故に仁者とて  
あきらへ水の水えとぬきと東海の海と西海の西海とて因島の仙根行もあ  
まくともと生氣ある處とてうんや生氣とわざとやなあとて神  
人の時代昌盛至満とて民へ主敵じよたよま欲やまきは唐と平とを敵  
敵あり傷けの法とてくわいた佛法のけんと害あるのとて儒法も又害  
ある。問儒法の中圓の法とてかくと術と何と  
云中國ハ大和天西の中  
毛とねずち氣とて地氣厚とて力のと實とてあまきりかく人情厚と  
てかくと見とてア因を以て後又うそて忍耐やかく能くたうとてくわきはあらぐく衰情輕身よも  
うちのとてもと見とて是圓人よとめじとて人や喜んでとて親するのみ  
は膳と足まは葬礼吊問の儀はなしとてとかひきとて身の儀はとて是  
とて人や他の死をとてあらうとて九十九とて死するはとてみうる。ぬきとて  
ぬきとての死するはとて見ゆべ親するはとて死するはとてみうる。ぬきとて  
ぬきとての死するはとて見ゆべ親するはとて死するはとてみうる。ぬきとて



人民うつむかへしとて三毛御のち葬とするをもとはあらわす時の勢  
氣也と爲すとて問お葬とす前棺をもゆるをもとはあらわす時の勢  
氣也と易簡の事なりとすとて問おは戎國の伝法の事よりモテ用てむ  
べとも見ゆる。おもと云ひ神通と見てゆるをも候象國モリト乃(さ)る  
事也。まことや。云ニ經の神奈川神代の經典。上古と書を  
文書か。是と極めて象と比もよきての象とし。後漢書の象と  
歛と云ふの象と。又アと知仁勇の二、天下の達徳。紀義別序傳の  
み天下の達徳。又その記に「君臣の象、國力から主婦の別、智」  
と云ふと云長効の序。記に「國の宣よ生此後は知仁勇の事也。五道  
の通路。天官造化の事なり。」と云亨利貞と云ふ傳の四傳。アと仁義  
礼智信。序を一理に氣を一氣にあらへて天下の事也。と達徳とナリ  
カシム。知仁勇の傳。序を云ふ。人情である。人情である。耳目鼻  
手足の事。口の事。耳目鼻手足の事。金を以て人  
をうながして人をうながして人をうながして人をうながして人をうながして  
同體に勇の多生中生。而勇の多生中生。而勇の多生中生。而勇の多生中生。  
勇の傳あるとて後名有る名有りて後傳ある耳目有く後多有り名有り  
て後耳目あるま人生き後人の名有り耳目有く後耳目有り。後耳目有り。中國  
をうながして耳目有りて後傳あるとて後名有り耳目有く後耳目有り。後耳目有り。中國

ありまのあからり後世まで教をもとめ無故よき國の聖人をよろしくて教と  
そを説いての聖人をもとめ信曾の三徳と云即ちの神人ハニミトミ神の神  
ヨリトモカリ神ハルシテ古象也神靈寶劍肉身所の象を仰て之の三  
徳とぞしも禮書トシテアリトモ神代の文字をもハ絶てア傳もとく  
三經の象のものうそも至易至簡かにて徳主術の圓滑しき  
明唐大深遠神妙幽玄悠久らしく傳きよん法政教他を承めずして  
是れ名号又字ハ人の意トキモ可也と云ふ可也  
三經の神氣の詮解ハ中庸の事ニシカナト上古の神ノ事ニ有る  
は事ニモ可也別外にトキモ可也事ニモ可也事ニモ可也事ニモ可也  
日中の水土火の神乃ニシカナト極圓(もがく)トモ可也事ニモ可也  
唐主の水土火の聖教也又日中火水土火也事ニモ可也事ニモ可也  
佛教也文主三輪也事ニシカナト天地と文也トシテ太極(だいかく)トニカナ  
人ノ多は中日火成度少於の事ニシカナト文也トモトシテ太極(だいかく)トニカナ  
地のやうハ勝(こ)のそれトシテスオの中術そ物我あむ人より至耳目口鼻也ア  
をもとくかの如ニ尙(さう)ハ皆玉帝の一傳(いつせん)トニシカナトシテ  
思ひしるの事トシ日中の聖也全限(ぜんげん)も生(おき)も中日成度の者  
あて取(と)も其(そ)外(ほか)の事(こと)トシ日中の聖(せい)トシ日中の聖(せい)  
中(なか)も日(ひ)も火(ひ)も人(ひと)の氣(き)とす(す)中(なか)も火(ひ)も人(ひと)の  
今佛教の文字名号(めいごう)ハ箇中(かちゆう)の文章(ぶんじょう)トシテ中(なか)の文字(じふ)トシテ中(なか)の  
人(ひと)佛(ぶつ)トシテアリトモ又字(じふ)トシテ佛(ぶつ)乃(の)をもつて人(ひと)佛(ぶつ)トシテアリトモ

向之權力象也。やうやく物あらわす。附の神代の教主。政通ひそ

云天苑

上世至徳至治の時より何を書く有りんと徳感也——て本氣事と用ひ  
處へ引偽候事からく方物生ましも温和なる者よ慈愛の如き  
父也るもの慈愛の心あつてもよまじ育児者も人慈愛の徳あつても  
天下平らなうと支那兒も明友も慈愛の情よからず眞面目慈愛と  
きは生理の發見に附け生産天下よあつてハえと云人性ニ有りて仁と  
きすみを有するまの教よからず仁義の心のねこあるゆ氣象団声お氣  
水潤は流きやどりとあらははく——ゆゑもと角せくらむ人原  
してモロトロトモテアリテヨリ象山の日向の象ハ三種の神  
是れ唐之の象々ハ封させりてあよゆて象山——が——故に書かば  
ね立あ王代の昭仁寺の象の事にて是れ御くおゆめの御もとを御



考をもよき掌ぢ法師等すれどか  
傍ら今の儒子の私あらずは朱子も王子も法道の助とひきりりて  
せうか一用を絶ひかへ害あり一奉司も絶ひ奉司害者一玉子の者  
參まこと僧法とて猶一例きとも心も者とも多くは僧法よりとむる所  
く世の儒子焉うり凡ても大簡より莊老の道よりて僧法よりとむる所  
是の水土今の大法なりけり一奉司文の運とてやまは文字は次第又  
博くかをもす者多くなりて禪家体儀あとの世よりとて流とめあるもの  
同佛法を易簡するのこ身中の水土よりとて教と華严の道よりて  
前より親の身をもすとて火葬をもすとてはもはやあにたりとて是の  
まちうどふく殃をもとハヤ一佛法の流世傳の事とて此よりそれは  
人をはうむる爲め又今の財産の叶もする勢も有若人若よりの勢には  
アツム事にて可しきとへ哉陣立て方立ち財ハ城あれば堅切をも  
中へ死みて死むる死に物のより汝立古跡より遁きこそ棺槨よりま  
きを外物とめとせん 问作のじくらまは僧法よりとて兩色を管  
ねぐらやうゆく 云者すやうに 陰と陽と道と法とと禪て凡人死  
葬きり棺槨か一是五色の門よきとては後世より衣覆三面仰  
伏もさうなり矣うててや死ねばからりは時て財とくわくをも  
事よりは後世の世人棺槨の制よりは事とくわくをも

聖なる事と死之事。こと生之事。うらやまやる事の爲。天職を有す  
事。生と死。其の事也。死をもたらす死生と死生を蒙る所。食と一  
もて死を哀しむ事也。隣に御きとも別する事。人の情と彼獨と  
神農とは。死をもたらす黄帝。堯舜。禹。理と情と。此は圓公が示す  
情あり。而して理。此皆時。圓の代。ハ無事。あらかじめ算を平定  
の附運。高き。天地の物と生むる事。やもりなく財用の多きと水火の  
ノノノ民奈富とある。まづ。故よ詠者。キイキノ故也。す  
キ。故あり。聖人是を憂ひ。而れ文度式。枚多形。つみたゞ。先喪  
祭のキ。キは用と費。一て能とぬ。をも。其附。すよ。れ文。あつまそ  
そ。そ。お行か。及ばず。ト。事。あつま。後世。すみ。政令道成。先も。人ふ  
而。や。や。而。四。屏。の。氣。不。吸。か。一。地。の。もの。吸。生。じ。る。と。す。仰。一。蓋。分  
と。義。で。都。す。一。せ。事。多。一。そ。と。内。か。一。是。故。人。食。内。欲。す。故。而。將。為。  
如。ぬ。き。は。主。よ。ね。い。て。す。より。か。一。さん。や。他。の。あ。よ。れ。ゆ。そ。や。幽。年。六。草。木  
食。石。主。よ。壁。う。り。く。な。き。を。ぬ。し。く。て。病。を。き。れ。力。の。こ。み。一。是。三。家。食。す。  
一。附。の。れ。死。り。ら。ん。や。う。き。通。日。本。館。の。こ。ー。と。シ。衆。の。こ。も。よ。る。か。か。  
本。備。の。も。典。十。義。先。じ。ま。る。道。ま。の。名。を。る。モ。ー。前。も。う。ひ。る。モ。よ。う。る。義。方  
古。鳥。の。名。礼。法。と。聖。人。附。經。す。う。り。制。化。ー。ほ。も。の。か。あ。ハ。東。京。ふ。年  
か。ー。こ。う。附。す。ー。と。死。既。附。叶。う。ふ。六。道。よ。害。あ。も。あ。る。今。の。事。名  
す。法。と。し。れ。と。な。と。る。も。有。う。故。す。財。よ。急。と。ぐ。す。も。取。の。く。

ちかして法を異すにせば今日の財産は理りアモル財とセミモルト  
仕事は言ふるも手とまきうとく後世をもゆふものには元  
くゆくめのむを傳へての文國そと佛法あまのも内うと也見  
云こそも傳者の力より能のせよと周の代の富有なる財の氣を豈ぞ  
後世の貧乏國窮の民よくとく奉事の財がて事もあくはまつて  
ますまづめ上世の氣力を盡たうとの内うとまづ後世の衰て  
あよりアシもまた族とも同の氣度よくとくめを貪るものは葬のみ  
産業を失ふるも一董永うきとうやと葬といどもとーしてあら  
而貴するものは氣力も下りての歴史のやうに傳法を行ふ者肉外ちき  
事あらんと名とひて和とおもすむ乞方一氣度も或ハ幼きにと  
毛取うとほする事あらととれ一の時よ佛法吸込と喪祭ともよ  
易簡と利用を費さず事すれども氣力たゞ佛法入よ入ねまくは  
あらの豪傑か一故よまよ佛と伝せざるものに至りて則よ草のち  
あらと一も博識の者も多く佛よ入て財を一も能はずれ  
是爲よからず傳乃ハ唯ゆるのうと汝の君けと見よ四君良相あらま  
時運の寒とまくと人臣のうすく君のえをとめのえを毫一財用のま  
意と易簡のれ式と傳わ一誠と立て古質より風とくとくには  
誰も戒みの佛よ入じや且後を内うとよもはあらとあらじる人を  
まくは伝法今よすれどもとくとくとくとくとくとくとくとくとく

用をまつて又焚きしむ棺を以て易して其へ取扱ふるのを後世人  
の多くもするもむかひて施をもく用ひて次がるを多うてすら外  
たる所あるものより棺擲ゆる者あり况や民の度之を  
もは死の哀れに至る也葬のとのうちがむだる代毫とんと用ひて庶人のまゝ  
世人の多く十倍せり中國をまほねぬ者やもく用ひて庶人のまゝ  
生と死と元して棺なり又葬す地をまかまく大葬も又時の法の  
へあくまでも天也あくまでも人多は争ひときれ運ぬうともと  
あくまでも古葬も亦可し今時處よ高て家れの偽法成  
りて時は佛院あるもまづ古葬も亦可し今時處よ高て家れの偽法成  
りて者行まばは仏事も破却せんとくらむ初て大坂賣肉の化を外法  
をもとより葬業者とて金く仏事とは退あわぬ爲め今  
僧侶相をそに政と税をもあくまでも今く仏事とは退あわぬ爲め今  
車今くまことめやめて金の偽法とて見せた日知書中をもてりて土地村社も  
うきへり信傳すあつやくもううてとてあきず出来て明治  
賢居ゆかて偽法を用ひて他と公法へ一被びにほきよ思ひてえも  
大過て席をすりあん今度へまよ附の衣服食器をもあ工高を渡せのうも  
豪華も風氣をぬぐくよほくも農人の農業のとあ工高を渡せのうも  
よほくともうきてよれよれのうもあく有体あくとて葬祭  
の礼とあくじや 同氣を塞堵くへとくまほりや一併のうもあく有体あくとて葬祭  
三五の代へまのうへ一暮の氣を温めへとくまほりや一併のうもあく有体あくとて葬祭

まことに生れまつりとくをもて凡て此事の代より以て其の事  
む一きりあり一とも、首のものもあつて生きも歟。草木の身をもと  
まつまつては、用を失ひて人を死めり。殺し、ぬすづらともか盡きる  
もの無くして、年々もうす。ゆく年、風也。古  
今すくなくて、人あり。今も人多くして、今や一氣運。吾聞よきうて、人の多す  
まこと。今の大國と、生の徳がき。道がく徳。山道徳と、身起や歎へ  
たぬ實か。一ときも又念。通徳なき。徳法あり。是易易能し。  
云佛也。ときハ徳のねどか。人あす。併し、佛法あり。是易易能し。  
行主と云ふ。一來、真理の徳の心承き。戒法とぬと。自給の努力。犯を  
て可。同神事も。核まで。根脚。心もと。而も。大葬の心。不思議して  
考。大葬をも。戒ひ。も。大葬。も。上せ。不思議。材木に。山。赤糞。あく。をも。大  
云神事。核と。根脚。心もと。而も。上せ。不思議。材木に。山。赤糞。あく。をも。大  
も。大葬。も。戒ひ。も。大葬。も。上せ。不思議。材木に。山。赤糞。あく。をも。大  
日備。と。する。も。は。の。金。一。や。の。と。の。の。金。万。信。と。子。ね。あ。一  
そ。も。そ。う。ま。ふ。そ。は。廣。の。中。の。引。を。ま。と。一。金。と。う。さ。あ。一。金。と。う。  
多。一。年。と。食。も。生。ま。き。一。や。の。と。の。の。金。と。そ。う。葬。の。材。用。と。一  
絶。て。ハ。故。也。は。限。を。ま。く。す。今。の。祭。も。け。も。一。金。と。う。一。若。ら。行。也。

用節せよと財用とせよとあつて二十年三十年の間は葬の喪なるや  
あとも喪圓すと遠近と承先との力をもつて百年のもろよとあつて  
始ふる由は精力也と云ふ事す材用とあつてぬれ死とぬものと  
人せん多く喪やむをかずと申す事なり而も爲めとおぬとぬものと  
より百年の肉身人じうつせむて墓而もおこしむと急とれて葬れた  
ふるはゆゑて後づきありと歎くのよしと嘆と云て嘆とあを思ひ  
今、喪と云ふ事とあるにゆきとあくし萬物の人をもとみ七年血氣の  
声真うめらるゝより其聲を声真うキツム後をつくまぐとて口のやゑよからずと  
そとあふの體と死ぬる足らず食するものはずと口もて首足のやまうと  
禁ふて葬うはせし。問爾はうは極尙む食するものはむと歎と歎  
八就小考とすと官かしてかくと死限ありし。云程とくとくと生る時  
終食衣服をば是れもよあきて富貴貧賤候令まく恨むくせどんや死ハ  
キテキテしま合ひがれしあらくわゆる者ふの體と棺とも一柄と便  
も三年の形と水火かづれの事かへきす。問幽卒傷法とて報行  
あともかくは大方参祀のとてもうと葬れも安れの法より仰せ死  
まつてのまづ。喪式作法は十二も元和參の作法は墨面からむとあくし  
竹傷法を以て被ふ。喪祭とも牛角三升の度り。一方用て一方がもしよ  
正二十九日を限てかくはん。孝へか一筋と喪主は喪主と見あらす。一

又は死後ははまの人に見ゆる多すと衰むか一祭ハ吉禮か一收に放り  
昇る人こそ成みうと亦一も參礼の事精し祭一祭は今よりあるは參礼なり  
葬礼も中一おもたみのやうな事は仏法よりうそてえどり神職も精すものき  
アドミキアもあきこと亥時是ときは金がね葬礼が凶禮で日中の人の氣管よ  
病ひを除して生ハ月故ゆといひて西の月と日めどり先てあくらめ此後  
ナシモ享む事一と收の事一祭よ禮も死を送るの葬礼は精一教をうらむ  
五事を主として憂む事一とあら、恩と善の事を主つてりと先日ハ葬礼の事  
タリトモ佛法は參のされ皆ノ事參礼の事も年明以明とて皆  
もソノもの仰し放すを喜び高きあれ、西戒の精さとわめて日中の想を主ゆ  
加へキ事は三事佛道の礼にゆて粗きからぬを仰二事東西の中なる  
なほ欣樂哀風ともす尊びて是故は喪祭の礼なるも仰つて佛法の事あり  
神事の參法よりは日中の參法ハ大社も生而神シテナニかと仰ぐ人の說を起る  
事あり、即ち一時祭は參法、あらんから傷の神也と號てニモと云う號をも  
之稱にての法とどあて用ひて是す所あり日中の水牛膚スカウトより  
あらか、用ひてタニミキ參法あり人後の名と傳ひ也、同後の尼  
仰ひてたすくまに参法あり人後の名と傳ひ也、同後の尼  
云物の初々誠あからずとれども其一と云大吉と云奉事參法あり  
未だくはれありう一、ももくちと附ハ御歌空スカウト一、其歌と御歌  
參法す、向來と公相手ともあらず、この間有り



向圓滿へり。——は暮秋もるもとうもよつま。朝金の序へ。云羽毛月親  
先祖の所へれよ行道既にまきて潔齊へ。——君朝。生はきる乃祖と。——まく  
時ぬすと神前まきもゆて。事のあら是れのあら記先祖の神とある事  
潔齊也。——同祖日の多は上古かたむす。——中古よりのとくとすも  
云け即ち神じ父母死へ。——三年のもの多を凶れ。——三年とくと右氣と多毛神  
道の理也。——凶れと生む。——即ちの喪す。——三年とくと左氣と多毛神  
あつあきとも。理は年もあきとも。——朝日のかみ今也。——さよ  
あら後世神は望よひつきて。人皆多祀。——教と多毛神はよの間く  
居て。——今後もて。人情うすくする多毛人止よれこそも。——  
同氣也。——多毛人の氣うすく。——幼角えく事も多毛。——情うすれ事も多毛  
有毛し。——多毛事。——也。——多毛事。——多毛事。——多毛事。——多毛事。  
うと毛く。——四罪。——一年。——二年。——三。——四。——五。——六。——七。——八。——九。——十。——  
え。——云。——運。——氣。——多。——人。——生。——死。——多。——人。——事。——多。——見。——仰。——  
伏。——あ。——や。——圓。——多。——行。——多。——事。——多。——戒。——徳。——多。——死。——戰。——渾。——  
人の死も。——の。——か。——て。——この。——故。——多。——多。——事。——多。——と。——と。——人。——多。——死。——  
憂。——た。——死。——人。——葬。——地。——多。——く。——し。——る。——事。——多。——と。——と。——多。——事。——多。——書。——  
の。——明。——正。——多。——死。——事。——多。——中。——多。——葬。——地。——多。——く。——す。——  
云。——時。——多。——中。——多。——死。——事。——多。——と。——と。——多。——人。——道。——  
白。——感。——多。——と。——天地の氣。——清。——内。——多。——事。——多。——氣。——ク。——と。——吹。——方。——人  
も。——す。——れ。——く。——生。——も。——と。——知。——人。——爲。

同古葬神の易言と佛法の言と承

得するまゝうら地樂極の程也とて、爲人の惡をもつてぬく盡せられ  
あらば一もあらずて、今時の俗とて、事ひて可らず。云せんとあはは可  
たらん今の佛道は愚人をまじめし凡人ふる者とす。中庸はち悪とあるもあ  
そんとたゞは極至愚人を他方便唯殊而既得生極の體文を以て主觀  
を教へきる愚人とも念佛の功力を成佛するなり。吾りを被し  
戒を拂ひ却ひ耕行し地獄よりへとむきほへどもの忍辱の丸まふ文  
體り身辱の苦はかくもまゐらぬ方ほして一念の念佛を極至  
へすひぢう跡をとて向家是よりへと蓮家も念佛は毎日のかどうかうして  
誓と爲先願を教え年年とて口へと愚人のゆゑと生せしをと申すて  
ねあはんじま性の良ゆありて愚と痴と戻とやも良知あきは愚と  
うまこと一念ともすまむものとあゆむにまよすとゆへと御  
とまをうつむきれ事ならずや、ちが端まとも、ふむむとまじりて、御  
人といふをもるものとあへて、くもものとすも何まともぬのとくと西哉と不  
とく人いふて名をあひて、名をあひて、西哉といひて、せんじゆんとぞも皆め  
て念仏なり。即ちの言はふべとキヌトスハ極至愚人とす。愚達無能の  
者の事よりあへて、多鶴尼の爲する者との事かくへて、又まよふてりよす多  
くキヌトスハんやくのと見又多く善とぞむじゆのと見とぞもあはす。今  
ちくとて說へ——釋迦愚と爲れん者との事かくへて、西哉ゆゑと氣を扁たる  
佛道の説のとくうてよとぞもあはす。今  
ても若へゆくとゆへ——國の國語もよと前世の國語もちくことくよもく

因里とくらむやくは能せんをもててもうまくもあらう。慈悲たりと云ふは我  
祖師のまことに。まことに人間とちよてんと成らてして、富貴ちぢんこぢぢる  
天台よりかゝりて罪うす。まことに御懐教かとぞくふるもと  
あくと祈つまきしとぞ。自他の功利の人とおのれの功利と長じつての  
うらそととまことなり。色あきゆゑ人となるものは、苦惱と難の生身には  
あく才知平へよすきてぬきめでたさとけんもあらざるもの。たる人と  
はなるものしなねのとの念佛。まことにまことき見るまと伝ひきのうべに  
尼庵嘗膳のまほたぬとぞ。才力ハナリ。梵佛說の筋書きにて。愚蒙  
の人へ向ひたまこと。まこと。至寶の仰伏とはやのともの。の抱きと要人の傳  
化。まことに。平人の善よりるとの。天性の和らと身近して。より  
おゆで思とがち。おもひたり

寶永六年己丑立月吉旦

